

野鳥たより

—北海道—

第 3 4 号

編集者 北海道野鳥愛護会
発行者 北海道国土緑化推進委員会
発行日 昭和53年12月21日



コオリガモ 納沙布岬 昭和53年2月26日 撮影 猪口 卓



探鳥地案内(函館山)..... 2
 探鳥会案内..... 2
 鵒川におけるシギ・チドリ類の分布状況.....小林清勇..... 3
 動物園内の野生ガモ..... 6
 コウミスズメの救助と自然復帰の方法.....風間辰夫..... 7
 首輪をつけたガンをさがして下さい..... 8
 さえずり..... 9
 アメリカコガモの記録・保護されたセグロアジサシ・北海道探鳥の印象・トンボをとらえたハクセキレイ・オオモズを見ました・1978年夏鳥初認記録
 探鳥会報告.....鵒川・鵒川・野幌・ウトナイ.....10
 鳥民だより.....12

も く じ

函 館 山

探鳥地案内

- ◆位置 函館市 函館駅より南西約1.8 km
- ◆概況 高さ334 m、広葉樹が主で針葉樹、草地、崖地、岩礫等で植物の種類が多い。
- ◆交通 函館駅より登山口まで徒歩40分、登山口までバス又は近くまで市電。空港からはバスで駅前にて乗換え。
- ◆探鳥コース 登山口(護国神社横)より舗装自動車道路を登り、900 m 位に案内標識のある道路を車道と別れて左に登る。尾根に近くなる頃に道が左右に別れ、右、御殿山(山頂)左、千畳敷となっており矢印がある。山頂コースは尾根に出てから右へ舗装道路を行き、行かない場合はそのまま左へ尾根の自動車道を通ってコンクリート建の月見台のある広場に行き、右に登れば千畳敷(草地)、月見台より無線塔に向かって30 m 位よ

り左へ細い登山道路七曲りを通って下山する。自動車道路に出て左へ曲る(右は立待岬)550 m 位歩いて自動車侵入禁止の遊歩道を入り休憩所のある碧血碑の横の細い道を登り、細い道の交叉点を右に進み杉林を通って登山口に出ます。所要時間3時間、休憩、観光等をする場合は充分時間が必要。その他種々のコースがあるが体力と時間に合わせて計画するとよい。



◆地図 5万分の1、函館 2万5千分の1、函館 立待岬(11頁に続く)(森口和明)



3月までの予定。寒い季節ですが、冬でなければ見られない鳥に逢う楽しみがあります。防寒の用意をしてご参加下さい。

<藤の沢探鳥会>

とき 昭和54年1月28日(日) 午前10時から

ところ 札幌市南区藤の沢2区 白鳥園 電話6918317
 内容 小鳥の村の小沢村長さん宅の給餌施設に集まる野鳥を観察します。室内からみめますので家族向きです。

交通 定鉄バス定山溪線「藤の沢」下車。白鳥園まで徒歩15分くらい。札幌駅前から藤の沢までは約40分。合計1時間。

持ち物 昼食、観察用具。

参加費 200円 雪が降っても行きます。昼食時みそ汁がです。

<野幌探鳥会>

とき 昭和54年2月18日(日)
 ところ 国鉄 大麻駅、待合室に午前9時集合
 持ち物 昼食、観察用具、歩行に適したスキーが必要です。吹雪でない限り行きます。

<ウトナイ湖探鳥会>

とき 昭和54年4月1日(日)午前10時(3月分を4月1日にします)
 ところ ウトナイ湖畔
 内容 北帰途中のハクチョウ、ガン、カモ類やオオワシ、オジロワシ等が見られます。

交通 中央バスターミナル発 8:30、登別温泉行きウトナイ下車。

持ち物 昼食、観察用具。

鷓川における

シギ・チドリ類の分布状況

小林 清 勇

1 はじめに

シギ・チドリが特定の環境で、どのように分布をしているかに興味をもち、鷓川の干潟において、シギ・チドリの分布状況を調査したので報告する。

2 調査地概要

調査地は鷓川町市街地の南1.5kmに所在し、干潟と後背の牧草地及び河口を含む地帯である。分布状況をみるため、調査地を9区分に分けた。

〔区分〕 図1

潟湖干潟：(A)干出部、(B)水没部

草地：(C)芝状草地、(D)丈高草地、(E)湿草地

河口干潟：(F)干出部、(G)水没部

その他：(H)砂浜、(I)空中（飛翔）

ここで見られる干潟は、潟湖干潟及び河口干潟で規模が小さく、満潮時や川の増水時には干出部が極度に狭くなる。海岸線に沿って平行に走る潟湖に一つの干潟が見られ、河口の縁に砂質性のもう一つの干潟が見られる。河口干潟の調査はその一部にとどめた。

草地は三つに分けた。芝状草地は、随時牛・馬の放牧がなされ、草丈が春秋共に10cm以下の地帯である。丈高草地は、草丈が春期に比較的低いとはいえ、秋期には70cm前後に達する。またハマナスが見られ、荒地化した部分がある。湿草地は、潟湖干潟際に見られるガマ・ヨシ群落とその縁の牧草地で、時おり冠水する。砂浜は、海岸線に見られ釣り人の出入りが多い。

3 調査方法

調査は1976年に、春期10日・秋期19日行った。調査方法は、図1に示したコースでロードサイド・カウントを行い、①②③④の各地点で定点カウントを併用して行った。カウントは基本的にはこのコースに従ったが、8月27日、9月5日、11月3日には海岸線及び調査地北西の沼（図

1にはない）まで延長した。カウントに際して、出現鳥類の種及び個体数を記録し、特にシギ・チドリについては出現部位と行動を記録した。なお、調査には8倍双眼鏡と25倍スポッティング・スコープを使用した。

4 調査結果

(1) 渡来状況

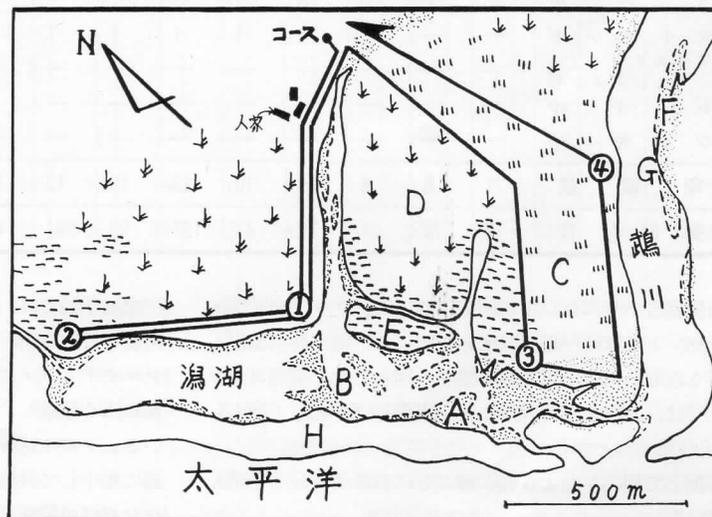
調査期間中のシギ・チドリの個体数は、種ごとに1日の最大出現数で表わし、表1に示した。

期間中、シギ sp・ジシギ spを含めて34種のシギ・チドリが認められた。この内、種別合計上位6種についてみると、それぞれ時期をずらして渡来していることがわかる。またキョウジョシギは春期渡来型を示し、メダイチドリ・ムナグロ・ダイゼンは秋期渡来型を示した。細かくみると、春期はキョウジョシギが4月下旬から5月中旬に、続いてトウネン・ハマシギがピークを迎えている。秋期は、ムナグロ・トウネン（8月）、メダイチドリ（9月）、ダイゼン（10月）、ハマシギ（10月中旬以降）の順にピークをみている。

(2) 分布

分布は出現回数の多いもの11種について、各区分への

(図1) 鷓川干潟略図



〔表1〕 シギ・チドリカウントデータ

月 日	4 17	〃 29	〃 30	5 7	〃 12	〃 14	〃 16	〃 19	〃 26	〃 28	8 6	〃 14	〃 17	〃 20
コチドリ	—	—	—	2	1	1	3	2	2	1	—	—	4	—
シロチドリ	—	2	13	11	2	3	3	2	2	7	—	—	—	—
メダイチドリ	—	1	—	3	1	2	—	1	—	1	2	—	2	4
ムナグロ	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	39	52	60
ダイゼン	—	4	4	5	—	9	4	7	4	—	—	5	8	5
タゲリ	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
キョウジョシギ	—	60	—	41	20	26	30	23	17	7	—	2	—	2
トウネン	—	—	—	6	7	4	9	39	2	9	—	1	45	17
ヒバリシギ	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	7	—	—
オジロトウネン	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—	—	—	—	—
ウズラシギ	—	—	—	—	—	—	—	4	—	—	—	—	—	—
ハマシギ	—	6	7	8	10	57	28	200	5	—	—	—	3	1
サルハマシギ	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	4
コオバシギ	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1
オバシギ	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
ミュビシギ	—	—	—	—	—	—	2	—	—	—	—	—	—	—
エリマキシギ	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
キリアイ	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
ツルシギ	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
アオアシシギ	—	—	—	—	—	23	—	—	—	—	2	—	—	—
タカブシギ	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—	2	1	—
キアシシギ	—	—	—	—	2	1	1	2	2	—	—	—	1	—
イソシギ	2	3	1	1	2	2	1	2	1	1	—	2	2	1
ソリハシシギ	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	5
オオソリハシシギ	—	—	—	—	—	—	3	—	—	—	—	—	—	—
ダイシャクシギ	—	1	1	—	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—
ホウロクシギ	—	1	1	—	—	1	—	—	—	—	—	—	—	—
チュウシャクシギ	—	—	—	—	—	7	12	10	7	4	—	—	—	—
コシャクシギ	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
タシギ	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
オオジシギ	—	—	—	1	1	1	1	1	4	1	—	1	—	—
アカエリ ヒレアシシギ	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
シギ sp	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
ジシギ sp	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
種類数	1	8	6	9	10	13	13	13	10	8	2	8	9	10
総個体数	2	78	27	78	47	137	98	294	46	31	4	59	118	100

出現度合いをみた。出現回数について、ロードサイド・カウントでは同一環境（区分）内に同一種が何羽出現しようとも、同時出現である限り1回とした。定点カウントでは、カウント時間内に何羽出現しようとも1回とした。

表2で明らかのように、種ごとに特徴的な分布を示している。

潟湖干潟では、チュウシャクシギを除く10種が頻繁に出現しているが、その採餌部位には差異が認められた。シロチドリ・メダイチドリ・ムナグロ・ダイゼンは干出部に広く分散し、採餌は幾分水際寄りの地表面で行っている。トウネン・ハマシギは、汀線附近の干出部及び浅瀬に集中して採餌をし、またアオアシシギ・オオソリハシギは水没部に著しく片寄り、比較的水深の深い所で

8 24	〃 27	〃 29	9 5	〃 8	〃 15	〃 17	〃 21	10 3	〃 9	〃 13	〃 16	〃 20	11 3	〃 10	種 別 合 計
1	—	—	—	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	18
—	—	2	—	—	—	—	—	2	—	—	—	—	—	—	49
8	9	8	29	7	58	40	35	51	24	8	31	—	—	—	325
35	83	24	37	4	3	9	2	6	6	3	4	1	1	—	369
11	6	5	1	1	8	6	14	32	23	25	43	25	11	3	269
—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—	1
1	—	—	—	—	1	2	1	—	1	—	—	1	—	—	235
9	4	10	4	5	6	6	3	3	—	1	—	—	—	—	190
1	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—	—	—	—	—	9
—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1
—	—	—	—	—	2	—	—	—	1	1	—	—	—	—	8
1	3	1	4	5	13	10	13	11	46	173	276	192	184	65	1,322
1	—	—	—	1	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	7
—	—	—	2	—	2	—	—	—	—	—	—	—	—	—	5
—	1	—	10	—	—	—	—	1	—	—	—	—	—	—	12
—	1	—	—	—	—	—	—	25	19	19	14	3	1	—	84
—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—	—	—	—	—	1
—	1	—	4	—	4	—	1	—	—	—	—	—	1	—	11
—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—	—	—	—	—	1
8	1	2	—	—	5	7	4	4	4	3	4	1	2	—	70
1	—	—	—	2	—	2	—	—	—	—	—	—	—	—	9
1	—	1	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	12
—	1	2	2	3	1	1	—	—	—	—	—	—	—	—	31
10	5	10	8	4	—	2	1	—	—	—	—	—	—	—	45
—	2	4	4	7	9	11	11	8	4	1	5	1	5	—	75
—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	3
—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	3
1	1	1	—	1	—	1	—	—	1	—	—	—	—	—	46
—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—	—	—	—	—	1
—	—	—	4	2	1	—	—	—	1	—	—	1	—	—	9
—	—	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	12
—	—	—	—	—	8	—	—	—	—	—	—	—	—	—	8
—	—	—	—	—	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1
—	—	—	—	—	—	1	—	—	—	—	—	—	—	—	1
14	13	13	13	13	16	13	14	10	11	9	8	8	7	2	34
89	118	71	110	43	123	98	89	143	130	234	378	225	205	68	3,243

も採餌をしていた。さらにキョウジョシギは干潟でも木切れ、草茎・貝殻等の打揚物の多い部分に出現し、それら打揚物をはぐりながら採餌をしている。イソシギは開けた潟湖干潟の中央部には出現せず、草地内に小川のように入り込んだ干潟の縁の部分に出現している。

草地に分布する種は、主としてムナグロ・ダイゼン・キョウジョシギ・チュウシャクシギで、芝状草地には4

種が共通して出現している。この草地には牛・馬が放牧され、これらの糞に、しばしば嘴跡が見られる。また実際にムナグロ・ダイゼンが牛糞をつつくのを観察しているので、糞に集まる昆虫を食べるかもしれない。ダイゼンでは満潮時に、潟湖干潟から芝状草地への移動を5回観察しており、この草地は本種にとって二次的な採餌場かもしれない。芝状草地の他に、キョウジョシギが湿草

地で、チュウシャクシギは丈高草地で採餌をしている。キョウジョシギの湿草地への出現は、縁の打揚物の多い部分であった。またチュウシャクシギについては、東京湾の葛西干潟においてカニ類の捕食が観察されているが、本調査地では草地での出現が高く、食性の相違が予想される。

河口干潟及び砂浜への分布は顕著ではない。河口干潟での各種の採餌部位をみると、潟湖干潟のそれとほぼ同様の傾向を示し、砂浜への出現は通過・休息であり、全く採餌によるものではなかった。

以上のように、今回の調査は干潟内・草地内分布の概略をつかむにとどまったが、各種の分布構造はその餌動

物の質及び量、泥質、後背地の内容等様々な因子と結びついているだろう。そして、一方で天候・潮汐の変化によって分類し、一方で行動内容（採餌か休息）かによって分類しながら各種についての環境利用の仕方を考えなければならぬ。今後検討して行きたい。

5 文 献

- (1) 秋山章男・松田道生 1974 干潟の生物観察ハンドブック 東洋館出版社 東京
- (2) 日本野鳥の会・干潟研究会 1974 葛西沖公園野鳥生息現況調査
- (3) 日本野鳥の会 1974 葛西沖公園野鳥生息現況調査報告書

〔表2〕 シギ・チドリの出現状況

種 名	潟湖干潟		草 地			河 口 干 潟		そ の 他		出現回数
	A	B	C	D	E	F	G	H	I	
シロチドリ	25	2	1	—	—	1	—	—	1	30
メダイチドリ	34	2	2	—	—	1	—	2	—	41
ムナグロ	16	—	12	—	—	4	1	2	4	39
ダイゼン	42	4	13	—	1	6	—	4	6	76
キョウジョシギ	9	1	6	—	10	—	—	—	2	28
トウネン	38	9	1	—	—	3	2	—	—	53
ハマシギ	29	41	5	—	3	4	1	1	6	90
アオアシシギ	1	28	—	—	—	1	1	3	8	42
イソシギ	20	8	1	—	4	—	—	—	7	40
オオソリハシギ	3	23	—	—	—	1	—	2	—	29
チュウシャクシギ	1	2	8	5	—	—	—	1	1	18

動物園内の野生カモ

円山動物園

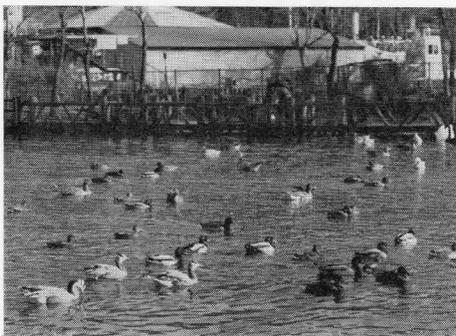
金 田 寿 夫

動物園内の「白鳥池」は周囲200メートルの水禽類の放養場で、コブハクチョウ、コクチョウ、オオハクチョウ、マガモ、インドガン、マガモ、カルガモなど16種、200羽の水鳥が飼育されており、陸部には自然

繁殖助長のため巣箱を設置したり、ヤナギ、イボタ、カラマツなどを植樹しております。

本来の目的である水禽類の繁殖成績はカラスによる卵や雛の食害のため、本年などは全滅状態ですが、池の環境整備がすすむにつれて、野性のカモ類が渡りの途中で休息のため利用するようになり関係者を喜ばせております。今までに観察された種類は、コガモ、オシドリ、マガモ、カルガモで、とくにマガモ、カルガモは数が多く、昨年は最高200羽が池の結氷する12月中旬まで滞在しておりました。

今年は白鳥池の改修工事のため現在50羽ほどですが、この工事が完成すると寒さに強い種類は池で越冬させることが可能となり、さらに池の3分の1近くは凍らなくなるので、野生カモも一緒に居ついてくれるのではないかと楽しみにしています。



コウミスズメの 救助と自然復帰の方法

風 間 辰 夫

1 はじめに

野鳥の救助（自然界で怪我したり農薬などによって動けなくなった野鳥）と自然復帰の方法はまだまだ完全に研究されておらず、これからの問題である。昭和56年度までに全国の都道府県では環境庁の指示にもとづいて鳥獣センターが設置されることになるが、このセンターの役割は「傷病野鳥」を救助し、自然復帰させてやるのが一番の仕事とならなければならない。私は昭和47年から本年6月までの間に、101種、980羽の傷病野鳥を取扱ってみたが、そのうち落鳥は20パーセント、自然復帰は60パーセント、残りの20パーセントは自然復帰できなくて、継続飼育している数である。これは全国的に見た場合、年間2,000羽（新潟県では200羽ぐらい）のうち自然復帰は27パーセント、落鳥は45パーセントということから比較して、日本では一番良い成績と思っている。

昨年（昭和52年）来日されたイギリスのマッシュズ教授が、私の所へ見学に来られ、約2時間にわたって施設を見られたり、話を聞かれたが、その時、私は小型鳥類の翼骨折治療方法について、適当なケージに入れて静かに（人間が見えないようにしておく）しておけば7～10日間で治癒できると話をしたところ、イギリスでもそのようにやっていると言われた。私の方法は誰に聞いたものでもなく、また本を読んだものでもなく、ただ自分が30数年間（生まれてすぐかもしれないが）鳥と共に生活してきたり、山野をかけめぐったその中から私なりに見出した知識をもとにして傷病鳥の治療や自然復帰の方法を試みたわけである。これから述べるコウミスズメの件については、間違っているかもしれないが、私の下手な方法を述べご参考になりたいと思う。

2 救助の方法

コウミスズメやウミスズメ科に属する鳥は飼育方法がわからず、落鳥させる場合が多いので、以下の要領でやってはいかがと思う。

(1) 持ち込まれる状況

コウミスズメは比較的沖合の鳥であり、冬期非常に荒れた時期に内陸へ迷行して保護される場合が多いので、殆どが餌を捕っておらず栄養失調の状態である。まず外傷はないと見られるので、どうやって餌を与えるかが本

種救助のポイントとなる。

(2) 餌を与える方法

弱った個体に対して一番大切なのは「保温」することであり、餌はその次となる。私が述べるまでもなく鳥類とくに海鳥の場合は非常に多くの餌を必要としているので、ワシ、タカ類のように7～15日間平気というわけにはいかない。2～3日与えないと落鳥してしまうので、とにかく餌を与える方法をどうするか。それによって大部分の鳥類は助かるかどうかが決まる。

まず体重を測定してもらい45グラム前後であれば、私がかこれから再三申し上げる栄養剤を与える必要はない。45グラム前後であったなら、自身の魚を細かくして（タラ、ワカサギなどの骨を取った部分で、冷凍の場合は解かしてからやる）「わり餌」（口をあけて与える方法）をしてやるわけである。

この方法は1人で困難であったなら、2人でやることである。1日に2～3回与え、その後は、保温しておくわけである。（量は1日20グラム位）

(3) 栄養剤を与えるのはどういふ場合か。

栄養剤を与える場合は、体重が30グラム以下であった場合であり、この場合、テラエッグ（テラマイシン＋総合ビタミン剤）をまぜて与えるわけである。テラエッグは粉になっているので、これを白味の魚にふりかけて与えればよい。また極めて弱っており、体重が20グラム前後という状態であれば、魚は与えず、テラエッグのみを水（塩水ではない）で溶かし、注射器の針をとったもので吸い上げて、これを口から注入するわけである。

(4) 収容する場所はどんな所が良いか。

自然の日照時間に合わせて、特別暖かくしたりしてはいけない。餌を与える以外は人間がそばへ近寄らないことが大切である。応急の場合を除いては、昼間は明るく夜間は暗くなる場所が一番良い。木箱のような中（下へはコモなどを敷くと良い）へ入れておくのも良い。綿は必要ないが、回復したらだんだん広い場所へ移すのが良いわけである。

(5) 水に入れてはいけない。

水鳥だからといって、弱っている個体を水につけることは、体温を下げさらに弱らせる原因となるので、水は回復するまで必要ない。

(6) 骨折の場合はどうするか。

翼骨折の場合は、そのまましておくこと。獣医師のよりに体を動かすと悪いとあって、固定するようなことは絶対にいけない。複雑骨折の場合以外は7~10日間で自然治癒するわけである。足の骨折の場合は、足とそえ木の間に脱脂綿をはさみ、血液が止まらないようにしておく。

(7) 重油等がついている場合

体の3分の1位であれば助かるから、その場合は、弱っていないかったら、三井パーライト1号という粒度1.2ミリ以下の吸油剤(石を粉状にしたもので害はない)をふりかけて取除くこと。急を要する場合は、ハサミで、油の部分を取除くことである。

3 自然復帰の方法

(1) 放鳥のタイミングを誤らぬこと

海鳥というのは、放鳥のタイミングを誤ると、自然復帰は不可能になるので十分注意すること。前記の方法、もしくは別な方法で回復したら、海水を容器に入れ(塩

水でも良い)3~5日間、水にぬらし、これをはじき飛ばすようであつたら、すぐ海岸へ持って行って放鳥することである。水の中へ入れてずぶぬれになるようではダメであるから念のため。

(2) できるだけ自由にする

回復したら、少し広い場所へ入れて、できるだけ自由に動かすことである。

(3) どのぐらいで自然復帰できるか。

弱ったのを収容してから1ヶ月以内であり、それ以上たつと無理である。それ以上の場合はまた別な方法があるが、ここでは省略する。

以上簡単に申し上げたが、絶対に実施してはいけないことがあるのでそれを述べておく。

- ① 牛乳や卵黄はやらないこと。
- ② 注射は絶対にしないこと。
- ③ 保温に綿を使わないこと。
- ④ ブドウ糖を飲ませないこと。
- ⑤ 魚を煮たり焼いたりして与えないこと。

(筆者 新潟県在住)

首輪をつけたガンをさがして下さい

(編集部)

環境庁から本会あてにガンの調査依頼がありましたので、お知らせします。

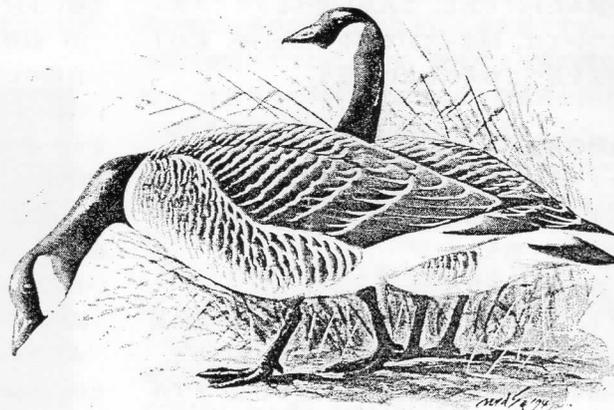
本年、アリューシャン列島のAgatta島でアメリカ政府の手により、シジュウカラガン139羽に足輪(金属製、番号入)と首輪(青のプラスチック製、白の番号入)をつけて、はなされました。おおむねカリフォルニアに渡るようですが、一部飛来する可能性があるということです。

観察事項は、下記のようになっています。観察された方は編集部まで連絡下さい。

- (1) 初めて観察した年月日及び時刻
- (2) 観察場所(住所及び位置)
- (3) 首輪の番号

- (4) 目立った行動
- (5) 観察した日のガン類の羽数
- (6) 最後に観察した年月日及び時刻
- (7) 観察者の住所、氏名及び所属

なお、ハクチョウの仲間にも首輪、足輪をつけているものがあります。お気付きの方は、これについても編集部までお知らせ下さい。

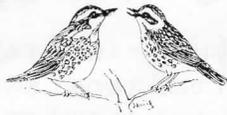


シジュウカラガン

Branta canadensis leucopareia

(環境庁送付の資料より転載)

さえずり



アメリカコガモの記録

札幌市 野村 悟郎

場所 野幌森林公園内瑞穂池（江別市）

日時 昭和53年11月4日

晴天の日の午後、瑞穂池のカモの数は約3,000羽。種類はマガモとコガモで、コガモの方が遙かに多く、全体の90パーセントぐらい。クマガラの声が時折聴こえるのが印象的。

この日は見られなかったが、この池の周囲の林には、「キッキキ」と鋭く続くタカの声を真似るカケスがいる。このことは、この池のカモ達をしつこく狙っているタカがいることと、この池のカモの多さを間接的に証明していることになるだろう。

「マガモの雄は殆んどのが生殖羽になっているが、コガモの方は色変わり進行中といったところ。」などと、カモの群を見て楽しんでいると、群から少し離れたところにいるコガモの番に目がいった。

最初は前を泳ぐ雄がきれいな生殖羽になっているなど思った程度であったが、間もなく前胸部の白斑に気がついた。アメリカコガモだと思い、見直した。しかし番のコガモは、飛び立って池の奥に移動してしまい、わずかの間しか見ることができなかった。しばらく再現を待っていたが、その様子はなかった。

池の奥のカモの群が、タカに襲われているらしく、騒然と飛び立って行った。それを眺めたのを最後にひきあげることにした。

このアメリカコガモと同個体と思われるものを、井上副会長も11月7日に同じ瑞穂池で観察されている。

保護されたセグロアジサシ

函館市 長尾 康

8月4日朝8時半頃、上磯町の東久根別バス停付近で弱っているこの鳥が保護されました。発見されたのは長川かよさんと、渡島支庁に届けられたものです。

森口和明氏のお手を煩わして調べていただいた結果、セグロアジサシとわかりました。いろいろ記録等を調べましたが、北海道でのこの鳥の記録は今回が初めてと思

われます。

なお、この鳥は残念なことに6日に死亡してしまいましたが、現在、道開拓記念館に剝製として保存されています。(53. 9)

北海道探鳥の印象

弘前市・高校生 田沢道広

北海道は、すべてにおいてスケールの大きい、大陸的な雰囲気たっぷりの、広大な地でした。さらに、人の手が入って間もないということも、札幌まで来てははっきりと感ずることができました。あれだけの都市で、すぐまわりにあのぐらい豊富な自然を残している所は、おそらく他にないのではないのでしょうか。

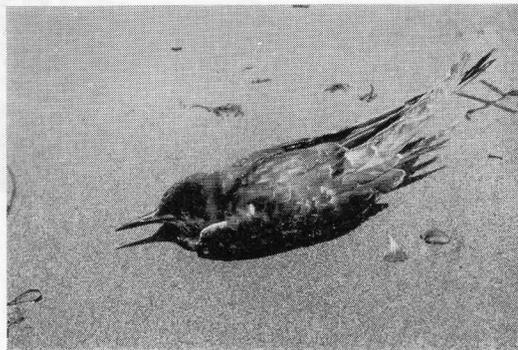
人間が急激に入ってきた以上、その自然と人工のきわだった対立はやむを得ないとして、カラスの多さと、彼等の無礼なふるまいには、閉口してしまいました。さしずめカラスは、夏、北海道にひしめく人間に例えられるのでは、と思ったのですが、それではカラスの方が迷惑でしょう。

いずれにしても、北海道は、この二つの対立が不安定な状態である。今のうちに、見れるだけ見ておかないと安定に近づくに従って、本土と変わらなくなってゆくのではないかと思います。

一方、お世話になった地元の方々からは、カラスと逆に、非常に親切にしてもらいました。おかげで、巣立ちまぎわのクマガラの巣を見つけ、一日中その家族をながめることができましたし、世界最大のシマフクロウの親子も、観察することができました。この場を借り、そのたくさんの方々にお礼申し上げます。

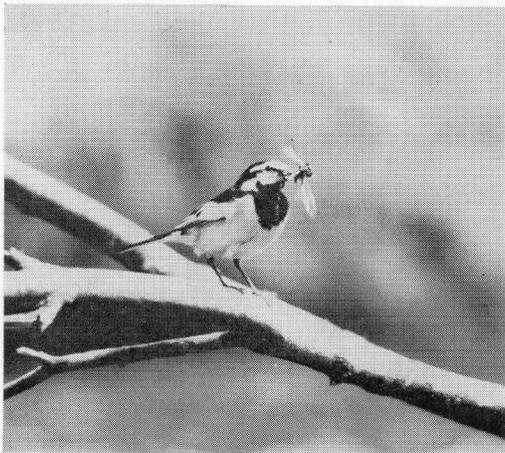
大沼で最後の夜を過ごした後、期待と不安をいっしょに乗せた青函とは別の、福島～三厩間のフェリーに、十分な満足感を受けて、晴天の水平線にかすんでゆく北海道に、静かに別れを告げました。

そして、最後の目的地である竜飛崎に寄り、その後まっすぐ弘前へ。なつかしい弘前の町並みが見えてきた時



セグロアジサシ

20日間、4,000キロ余に及ぶ旅の終止符が、西の地平線の薄雲の向こう側に、流れるような赤い光を溶かしながら、ゆっくりと確実に沈んでいきました。(53. 9)



ハクセキレイ
ニセコ昆布川 昭和53年5月29日

トンボをとらえたハクセキレイ

室蘭市 伊藤正清

昨年はヤマヤミを捜し求めて歩いたが、その時は、もう、すでに巣立ちの後であった。今年こそはと思い早目に捜し求めたが発見出来ず残念だった。ヤマヤミを捜し求めている途中、写真のセキレイを見つけた。今まで、セキレイの写真を何十枚と撮影しているが、トンボを喰わえて、ひと休みの写真ははじめてであった。

オオモズがいました

美唄市 鈴木悌司

昭和53年3月22日、晴、pm 2:30、千歳からの帰路。苫小牧方面から追分町手前約1km、国道234号線路傍。電線上、雪上にも舞降り、何やら採餌? をしている様子でした。(53. 3)

1978年夏鳥の初認記録

新妻 博

札幌市 真駒内地区				
種名	月日	種名	月日	
イソシギ	4. 19	モズ	4. 23	メジロ
カワセミ	4. 19	アオジ	4. 23	4. 29
ノビタキ	4. 19	イソヒヨドリ	4. 23	エゾムシクイ
キセキレイ	4. 19	イカル	4. 23	5. 11
ベニマシコ	4. 21	コルリ	4. 29	5. 14
ヤマシギ	4. 21	アカハラ	4. 29	ツツドリ
イワツバメ	4. 21	ウグイス	4. 29	5. 14
アリスイ	4. 23	ヤブサメ	4. 29	オオジシギ
				5. 14
				カツコウ
				5. 21
				ヨタカ
				6. 8
				ハリオアマツバメ
				6. 21
札幌市中央区北1西1 “及び豊平墓地”				
				メボソムシクイ
				6. 9

鵜川

53. 8. 27 9:30~14:00 晴
城殿 博



札幌発7時40分急行「えりも」は、1時間半で鵜川駅に到着した。途中、車窓から頬に受ける風は、秋の訪れを感じさせて爽やかであった。

各自身仕度を整えた後、河口へと出発する。まもなく取穂間近いトモロコシ畑で、モズの親子を発見。つづく放牧地でムクドリ、ハクセキレイ、ヒバリを見つけた。その後方の牛舎近くでは、ツバメとショウドウツバ

メがせわしく飛び交っていた。すっかり静寂を取り戻した草原には、冬羽に変わりつつあるノビタキや、今だに給餌にかかるホオアカ、アカモズの姿も散見することができた。

やがて河口の平潟に達する。そこで、忙がしげに採餌に飛び交うムナグロ、ソリハシシギ、アオアシシギ、タカブシギの

姿に、一同歓声をあげる。これらの鳥の種類と同定と数の算定をしていると、にわかに群れが乱れはじめた。あるものは他へ飛び去り、あるものは地面に腹ばいになって身をすくめる。すぐにそれがオオタカの若鳥の出現によるものだと知った。しかし何事もなく飛び去って

た。

草原の中のまっ赤に熟したハマナスの実を横目に、水辺沿いに進んで行くと、正面の水面にオオソリハシギやメダイチドリ、その他の鳥影が目に入った。それらの鳥を見やりながら少し早目の昼食をとることになった。日射しは強いものか、暑さは影をひそめ、実にはすがすがしい。

なおも珍種の出現に胸膨らませながら別の干潟に向かう。途中のヨシ原でクイナを日撃する。その後これが一羽の子づれと判明。

シギ、チドリの種類数は15種にとどまったとはいえ、天候に恵まれ、まさに探鳥会に相応しい一日であった。

〔記録された鳥〕 ツバメ ハクセキレイ ショウドウ ツバメ ヒバリ ホオアカ モズ ムクドリ キジバト ノビタキ カワラヒワ スズメ アカモズ オオタカ トビ オオセグロカモメ ウミネコ ハシボソガラス アオサギ オオジュリン クイナ カルガモ アオアシシギ ソリハシギ トウネン タカブシギ ムナグロ キリアイ イソシギ ハマシギ ダイゼン オオソリハシギ オバンギ ウズラシギ(?) オグロシギ エリマキシギ メダイチドリ 計36種

〔参加者〕 梅木賢俊 城殿博 新宮康生 萩千賀 山本一 鷺田善幸

〔担当幹事〕 羽田恭子 柳沢千代子

鵠 川

53. 9. 17 9: 35~13: 50

飯山五玖子

札幌を発つ時は空模様があやしげでしたが、鵠川が近づくにつれて晴れてきて、残暑の中での探鳥会となりました。メダイチドリやトウネンなど、どれも似たような姿形で見極めめるのに苦労をしますが、微妙な違いを知ることこそ、探鳥のおもしろみと知りました。

〔記録された鳥〕 アオサギ コガモ 種不明カモ トビ チュウヒ メダイチドリ50± ムナグロ2 ダイゼン3 トウネン7 ウズラシギ1 ハマシギ20+ キリアイ2 アオアシシギ3 オグロシギ10+ オオソリハシギ10 ホウロクシギ1 タシギ2 ユリカモメ オオセグロカ

モメ ウミネコ アジサシ キジバト ヒバリ ショウドウ ツバメ ハクセキレイ ノビタキ カワラヒワ スズメ ムクドリ ハシボソガラス ハシブトガラス 31種

〔参加者〕 野々村 菊 柳沢信雄・千代子 萩千賀 飯山五玖子 羽田恭子 6名

〔担当幹事〕 柳沢千代子 羽田恭子

野 幌

53. 10. 22 8: 20~13: 30

山田三夫

女の子が生まれたら「あと」と云う名にしようと考えていた。

独学独習を旨としていた私が、探鳥会に参加したのは今回が初めてである。予報と観天望氣を信じ雨の中を野幌へ行く。夫々の探鳥スタイルに気遅れする。

ヤマゲラのドラミングに始まった探鳥行は途中幾度かのカラ混群を観ながら、ゆるゆると歩む。好転した晩秋の青空に紅葉が映え、下生えのフッキソウは真珠の蒴果をつけ、ナニワズは早や来春の蕾を持っている。昼過ぎハイタカ、トビを含むノスリの飛翔を観る。51羽かぞえる。渡りである云う。大いに感動しながらも、首また大いに痛くなる。

7月に生まれた我児は男の子であったので「三平」と名づけた。この児と鳥を観て歩くのは、いつの事であろうか。

〔記録された鳥〕 種不明カモ トビ ハイタカ ノスリ キジバト ヤマゲラ アカゲラ コゲラ ヒヨドリ カヤクグリ マミチャジナイ ツグミ ウグイス キタイ タダキ エナガ ハシブトガラ ヒガラ ヤマガラ シジュウカラ ゴジュウカラ メジロ ホオジロ カシラダカ アオジ カワラヒワ イカル シメ スズメ ムクドリ カケス ハシボソガラス 32種

〔参加者〕 原田茂治・幸子 佐藤栄邦・ゆか 沢田マヤ子 斎藤和喜・孝子・努 天本治夫・恵子・義夫・恵美子・和子 野口正男 村上知巳 吉岡義明 藤沢伸也・宏樹 米山露子 野々村菊 水島洋子 土門礼子 小倉治子 中川夏子 福本とき子 岩間和彦・英子 相磯智

探鳥地案内 2ページより続く

◆注意事項 尾根より西斜面はコースがあるが間違ると崖地があり危険、海岸は一周できない。

◆見られる鳥 ウミウ ヒメウ ツミ ノスリ イソシギ キジバト アオバト ツツドリ アカゲラ コゲラ イワツバメ ハクセキレイ ビンズイ ヒヨドリ モズ コルリ オオルリ イソヒヨドリ トラツグミ クロツ

グミ アカハラ ツグミ ウグイス メボソムシクイ エゾムシクイ センダイムシクイ オオルリ ハシブトカラ ゴジュウカラ メジロ ホオジロ ホオアカ アオジ カワラヒワ コムクドリ等がみられ、保護等記録的なもの13種を含めると138種記録された。(海上を含まず)。

子 新宮康生 早瀬広司・富 山田三夫 天童雅俊 城
殿 博 武田中義・勝利 萩 千賀 神野敬子 羽田恭子
柳沢信雄・千代子 井上元則 42名
〔担当幹事〕 柳沢信雄 野口正男

ウトナイ

53. 11. 19 10:00~13:00

初めての探鳥会

村瀬克子

新聞に出ていたので探鳥会に行ってみないかとの誘いがあったのは、そろそろキャラバンシューズを片づけようかと考えていた時でした。山歩きが好きなので、2kmほど歩くと、という点に魅かれて、参加に決めました。

野鳥の好きな友人から、双眼鏡と図鑑を借り、即席野鳥愛好家となって、雨の中を出かけたのです。

国道ぞいの遊園池、その中の池のように、ウトナイ湖は広がっています。そして、私達のすぐ傍を大きな白鳥がゆったりと泳いでいました。あまりにアッサリ、苦もなく白鳥が見られたので、少々拍子抜けの気分です。後で、それはウトナイ湖に住みついているコブ白鳥だと知りました。道理で頭から首の辺りが黄色く薄汚れていて純白のイメージからは程遠いものでした。しかし、グレーの羽の幼鳥は、醜いどころかとても上品で、まだ汚れないその初々しさには、目が洗われるようでした。

身近かに見られたのは、その白鳥だけで、あとは双眼鏡に目をこらし、やっと見えるという状態です。

いまだに、アヒルとガチョウの区別がつかぬ私には、あれはオナガだ、ミコアイサだといわれても、その時はわかったつもりでも、もう一度のぞき直すと、もうどれがどれなのか、わからなくなってしまいます。チュウヒ、トビ、オジロワシ、チゴハヤブサ……と名前だけは覚えたものの、識別は全然です。ですから、会の方達が、すばやく特徴をとらえて種類を見極められるのには、ただただ驚くばかりでした。

初めての探鳥会。私にとって、鳥達の魅力は今ひとつというところですが、でも、懇切な説明を受けながら、望遠鏡をひしひしにのぞきこんでいると、寒いことも、時のたつのも忘れ、身も心もゆったり広がっていくようで、本当に気持ちの良い一日でした。

〔記録された鳥〕 アオサギ オオハクチョウ マガモ カルガモ コガモ ヒドリガモ オナガガモ ホシハジロ キンクロハジロ スズガモ ホオジロガモ ミコアイサ カワアイサ トビ オジロワシ チュウヒ チゴハヤブサ ハマシギ ツルシギ セグロカモメ オオセグロカモメ カモメ ハクセキレイ セグロセキレイ ホオジロ スズメ ハシボソガラス ハシブトガラス (コブハクチョウ) 29種

〔参加者〕 豊川政規 清水幸子 梶浦英子 野々村菊 米山露子 谷口一芳・登志 山本知子 村瀬克子 中山和子 新宮康生 柳沢千代子 山口信子 黒田声子 羽田恭子 萩 千賀 早瀬広司・富 苗田茂乃 上床ヒロ子 佐藤辰夫 松岡 茂 吉岡義明 他 2名 天本治夫 白沢昌彦 城殿 博

〔担当幹事〕 松岡 茂 羽田恭子



＜新年懇談会のご案内＞

下記の通り恒例の新年懇談会を開催します。お誘い合せの上、多数ご参加下さい。

記

- ◇とき 昭和54年1月27日(土) 13:30~16:30
- ◇ところ 札幌市中央区北4条西5丁目 林業会館 3階 A会議室
- ◇内容 それぞれのスライドなどを見せあいながら野鳥や植物、それに会のことなどについて懇談します。

◆写真展 カワセミの世界

写真家の嶋田忠さんの写真展が開かれますので、お知らせします。

期間 昭和54年1月16日~31日 9:00~7:30 (土・日休み)

場所 札幌キャンサロン(札幌市中央区北3条西4丁目 第一生命ビル4Fキャンサービス・ステーション内)

カラー全紙パネル 30枚ほど展示予定です。

◆一昨年まで本誌編集にたずさわった馬場錬成さんが東京に転勤されました。

新住所 〒272 市川市鬼高2の11の12

日商岩井中山マンション106

〔編〕〔集〕〔後〕〔記〕

すっかり冬になってしまいました。野鳥ファンの会員の皆様はこの冬をどうすごされますでしょうか。探鳥はお休みにして、もっぱらスキーへ、あるいは、室の中から餌台に集まる鳥達の観察でしょうか。

34号ようやく皆様のお手元にお届けすることができ

ました。最初に載せました小林さんはじめ、たくさんの方の原稿で紙面を構成することができました。中でも新潟の風間さんには、コムシズメの原稿をいただき、このような記事がいままでなかっただけに、大変参考になると思います。また円山動物園の金田さんには園内の野生ガモについて書いていただきました。ちょっとした野鳥の観察に最適の場所と思います。お出かけになる事をおすすめします。(三木記)

〔北海道野鳥愛護会〕 年会費 1,000円 (会計年度4月より) 振込 小樽 1 8 2 8 7
☎060 札幌市中央区北4条西5丁目(林業会館) 北海道国土緑化推進委員会内 ☎(261)9022